

章、心に残る美麗かつ適格な絵と写真、堅牢な装幀、上質の用紙、美しく正確な印刷など、どの角度から見ても、本書には人間の心と、人間が生み出した自然科学、歴史、文学、芸術などが渾然一体となって躍動しているといえよう。関心のある個人のみならず、図書館などの多くの公共機関で永久に保存されるべき名著であると私は信じて疑わない。

(藤田 尚男)

(ミクروسコピア出版会、考古堂書店、新潟市古町通四一五六三、電話〇二五一二二九一四〇五〇、二〇〇三年、A五判 二五七頁、定価 四六〇〇円)

遠藤 正治 著

### 『本草学と洋学 小野蘭山学統の研究』

小野蘭山の門人・飯沼慾齋が、我が国最初の近代的植物図譜『草木図説』を「閉居絶客」して執筆したとの通説がある。はたして、「閉居絶客」して科学的自然研究ができたのだろうか、という著者の素朴な疑問から出発したのが、この研究書である。

日本の本草学は江戸中期以降、いくつかの学統が形成されるが、小野蘭山によって一つの頂点に達したといわれている。本書は、本草学の通俗的なものではなく、京都で本草家塾を開いていた蘭山の学統を考察の対象にして、洋学の影響を受

け国際的視野を備えた博物学的な本草研究の実態を探り、一八五六年に美濃出身の飯沼慾齋によって出版された我が国最初の近代的植物図譜『草木図説』誕生の環境を明らかにしている。

慾齋と同じ岐阜在住の著者が、二〇〇三年までの二十数年間にわたる調査から、これまでに発表した論文を改訂・再編成してまとめた集大成である。蘭山が『本草綱目啓蒙』を著したのは、一八〇三年のことで、奇しくもちょうど二〇〇年後の同じ岐阜の地で蘭山学統についての本書がまとめられ、京都で出版されて、蘭山の業績にスポットがあたることとなった。

蘭山の業績は、島田充房との共著『花彙』や『本草綱目啓蒙』に尽きるものではない。千人をこえる門人を育て、その学統によって江戸末期の本草学の大隆盛がもたらされたことも重要な業績に数えてよい。特に、尾張出身の水谷豊文・伊藤圭介あるいは美濃出身の飯沼慾齋らを育て、彼らによって、洋学を採り入れた博物学への転換がはかられ、日本における近代的自然史研究の端緒が開かれた点は特筆されねばならない、と著者は述べている。

蘭山の東アジア的な本草学とその学統の洋学研究とはいかにむずびつのであるうか。日本の本草学が、中国本草学の受容に成功した後、中国の本草学とは明らかに異なった独自の展開を始めたのは江戸中期以降である。中国の本草学が薬性論に偏って多分に自然哲学的な考究に向かったのに対し

て、日本の本草学は薬理よりも名物学、物産学、博物学的傾向が強くなった。この傾向は蘭学、西洋博物学の影響を受けて著しく加速され、江戸末期において近代自然科学的な研究が蓄積されていく要因となった。

私自身も尾張に在住し、美濃を生活圏にしているという立場から、なぜ尾張と美濃の本草学が著しく近代博物学的な展開を示したかについては、以前から興味を持っていた。そうした視点からも、地域に縁の深い本草学者達の系譜と業績についてまとめられた本書は、待望の書であった。

著者は、昨年の十一月二十一日にも、内藤記念くすり博物館図書室に文献調査のために来館して、『医学館御薬園植附』『蘭方枢機』『和蘭局方』を閲覧された。特に『医学館御薬園植附』を熟覧する姿は印象深く記憶に新しい。このように各地へ直接に出向き、原資料を探索する地道な調査と研究の積み重ねを継続してまとめあげられた本書は、江戸期の本草学のみならず、西洋博物学、近代自然科学が日本で受容し発達した過程を知る上で、一読をお薦めしなければならない一冊である。

(野尻佳与子)

〔思文閣出版、京都市左京区田中閔田町二一七、電話〇七五一—七五一—一七八一、二〇〇三年四月、B五判、四〇九頁、本体七二〇〇円〕

酒井 シヅ 著

『絵で読む江戸の病と養生』

江戸日本の視覚文化は、T・スクリーチの『大江戸視覚革命』(一九九八年、作品社)にも見られるように、世界に誇るものがあつた。いっぽう医療の大衆化がはじまり、病気や健康に関する知識への欲求は今日と変わらない時代であつた。こうして病気や医療に関わる民衆のニーズに応えるには、視覚的メディアがもつとも有効であることはいうまでもない。出版文化の隆盛を背景に病気や医療に関わる錦絵などの絵解き刷り物が大量に出回つた。

本書は、昨年『病が語る日本史』(講談社)の好著を出された著者が、長年の研究生活の途次で出会ってこられた江戸時代に刊行された膨大な病気と医療に関わる視覚資料の中から、貴重で興味深いものを選びすぎり、一書にまとめられたものである。

著者はまず、幕末に刊行された『新撰病草紙』から江戸の病気の世界に誘い込む。この絵巻には馴染みの研究者も多いが、著者は取り上げた資料を、医学者と歴史家の二つの観察眼が一つになった眼差しで読み解いていく。

たとえば「蟻虫症の娘」について、「日本人は長い間寄生虫に苦しめられてきた。寄生虫が昔物語になったのは、戦後もかなりたつてからである。しかし、子供がかかる蟻虫症はなかなか根絶しにくい。蟻虫は雌が十ミリ前後、雄が二〜五ミ